JAPAN HONG KONG

飛 FLYING DRAGON 龍

日本香港協会ニュース No.79

香港地下鉄港島線が堅尼地城へ延伸

日本香港協会副理事長・広報委員長　小柳　淳

堅尼地城駅ホーム。既存の港島線と同じく筆文字の大きな駅名（写真：永田幸子）

香港島北西の西環と呼ばれる、西營盤、堅尼地城（Kennedy Town）へ2014年12月28日に地下鉄が伸びました。西環は比較的早くから開けて、110年前から路面電車が通っていたのに、地下鉄は1985年に上環まで開通し、そこで折返していました。

これまで西環の公共交通は路面電車とバスだけで、道路渋滞に巻き込まれて遅れることもありました。地下鉄なら時間どおりビューンと移動ができて、西環の利便性が格段に上がります。堅尼地城から上環までたった7分です。地下鉄の延伸を見越して、ホテルが新設されたり、オシャレな店が増えてきたりしましたが、同時に香港名物とも言える賃料上昇によって、古くからの地元の店が閉店に追い込まれる懸念もあります。

新しい駅は3つ。従来の終点上環から西營盤、香港大學、堅尼地城の順です。西營盤駅の開業は先送りされて3か月の間乗り降りはできず、2015年3月29日の開業となりました。一駅だけ後回しで開業してしまうという割切りの良さはいかにも香港らしいのですが、やはり文化の違いを感じます。ところで、香港大學の英文駅名はHong Kong Universityではなく HKUで、案内放送でも「エイチケーユー」と聞こえてくるといいます。

地下鉄の開通で路面電車やバスが衰退するかというと、その心配は不要かと思います。30年前に香港島に地下鉄ができたときも、同じ懸念が出ましたが、結局今日まで並行する交通機関はそれぞれ元気に営業しています。スピードの速い地下鉄に対して、乗り場がたくさんある路面電車、縦横に路線網を拡げるバスと、それぞれの利点が選択されているのです。それに香港の成長が需要そのものを増加させているようです。

香港では鉄道の新設計画がたくさん動いています。沙田から中環への新線、金鐘から香港島南岸へのルート、觀塘線の油麻地から先へ紅磡地区黄埔への延伸、中国と香港を結ぶ高速鉄道など、今後も開通ラッシュが続きます。

延伸区間は3駅分（写真：田村早苗）

2015年4月 発行（禁無断転載）

目　次

香港地下鉄港島線が堅尼地城へ延伸……1
フード・エキスポ2014～日本食品を香港から世界へ大々的に発信！……2
香港最大の映画の祭典、香港電影金像奨……4
スタンダードチャータード香港マラソン……5
香港の宿……6
連合会・各協会便り
全　国：香港春節レセプション2015開催……7
東　京：【女子プロジェクト】バウヒニア会第13弾イベントレポート……7
関　西："think GLOBAL,think HONG KONG" in大阪／チャイニーズ・ニュー・イヤー・パーティー2015……8
中　京：2015年年頭所感及び総会、セミナー、春節パーティー……9
九　州：春節シンポジウム＆パーティー開催……10
北海道：「香港と北海道」～協会設立10周年にあたって～……11
宮　城：2015春節セミナー＆パーティー／香港文化教室開催／広東語教室忘年飲茶会／仙台空港国際化利用促進協議会が香港を訪問……12
沖　縄：春節ランチョン開催／春節セミナー開催／香港航空貨物ターミナル社を見学……13
広　島：初めての海外取引セミナー＆相談会in尾道／「第15回香港フォーラム」「全国協会交流会」へ参加……14
新　潟：2015年春節セミナー＆パーティーを開催……15
CONRAD　TOKYOからのご案内……16

フード・エキスポ2014～日本食品を香港から世界へ大々的に発信！

香港貿易発展局大阪事務所長　伊東　正裕

2014年で第25回目を迎えるアジア最大級の食品展示会、香港貿易発展局主催のフード・エキスポ2014が、8月13日～17日、香港コンベンション＆エキシビション・センターにて大々的に開催された。同年度は、世界26ヶ国・地域から1182の出展者が集結、総展示面積4万1862㎡と過去最大規模となり、世界62ヶ国・地域から2万75人のバイヤーを含む総来場者数は46万人を超えた。日本からは、38都道府県から252団体・企業が出展、展示面積は2000㎡を超え、海外からのナショナル・パビリオンとしては、中国本土に次ぐ2番目の規模となった。日本を代表する著名ブランドとして、日清食品、ヤクルト、カゴメ、エバラ食品、フジッコ、伯方の塩、ヤマキ、伊藤ハムなどの食品メーカーのほか、ヤマトグローバル（物流サービス）、JR北海道（水産品販売）、ダイキン工業（抗菌関連商品）、日本ユニシス（冷凍保存技術）、阪急阪神百貨店（各地特産品の通信販売）、センチュリー（酒器）など非食品企業からの出展も増加、本展示会に対する日本企業の期待の大きさを窺わせた。

日本からは、林芳正農林水産大臣、櫻庭英悦農林水産省食料産業局長、浜野京日本貿易振興機構理事、成清一臣全農理事長、大西茂志全中常務理事、長屋信博全漁連専務理事、種田宏平農林中央金庫常務理事、仲井眞弘多沖縄県知事、谷本正憲富山県知事、上田文雄札幌市長をはじめとして多くのVIPの方々がエキスポを視察されるとともに、日本食品PRのためのトップセールスを積極的に展開した。

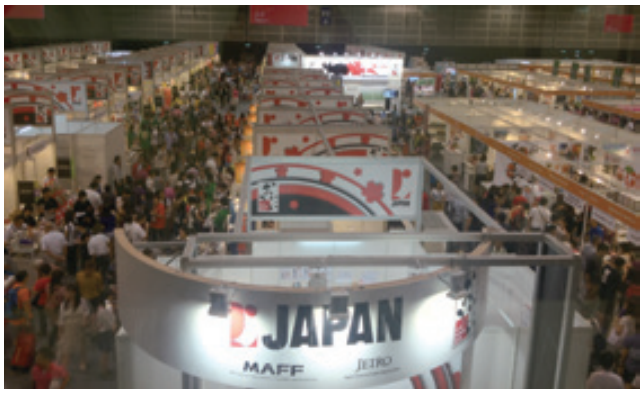
展示会会期中、調理実演やセミナーなどの関連イベントも数多く開催されたが、農林水産省のPRブースにおいては、「世界遺産」に認定された「和食」の対外発信が様々な形で行われた。中でも展示会初日には日本の出展者・関係者から提供された食材を使用して香港人トップシェフが腕を振るったフュージョン料理を日本・香港双方からのVIP80名にふるまった香港貿易発展局主催の「ガラ・ディナー」が注目を集めた。香港側からは、政府代表としてグレゴリー・ソー商務経済発展局長官、アンドリュー・ウォン商務経済発展局事務次官、立法評議会からジェフリー・ラム評議員、財界重鎮の新華集団ジョナサン・チョイ会長、四洲集団スティーブン・タイ会長、味珍味フランキー・ウー会長らが列席、香港の政官財界トップへの日本食材の絶好のPRの場となった。メニューは日本全国から集められた食材をふんだんに使用したフルコース料理（写真参照）で、前菜が北海道産毛蟹を使用したテリーヌとミルフィーユをあしらった「毛蟹とトマトのシンフォニー」、スープは「鶏の西京漬け入り松茸スープ」、メインの肉料理が飛騨高山の和牛を使用した「すきやき風鍋」、魚料理と主食が「アワビ、ホタテ、海ブドウの刺身・寿司盛」、最後に「黒豆・マンゴ・白桃のデザート」で締めくくられた。酒類は、食前酒として「三州梅酒10」（角谷文治郎商店）、食中酒として「純米大吟醸清酒　大天授」（麻原酒造）がそれぞれふるまわれた。日本の食材を、日本料理として、日本人シェフが、日本的に調理するのではなく、日本の食材を使い、国際感覚に秀でた香港人シェフが新感覚のフュージョン料理を創作するという試みは、今後の日本食品の香港市場における新たな発展の方向性に一つの示唆を与えるものといえよう。

林農水相（右から4人目）、浜野ジェトロ理事（左から3人目）

農林水産省の輸出統計によると、香港は2007年以降、食品・農水産物の輸出先としては、8年連続No.1の地位を保っており、ゲートウェイ／ハブの機能も兼ね備えた巨大市場である。2014年度の統計値によると、輸出金額6117億円中、22%を占める1343億円が香港向けとなっている。香港向けの上位品目は、真珠、たばこを除くと広東料理に使われる高級乾物食材（ナマコ、ホタテ、アワビ、ふかひれ）の金額が大きく、最近では和牛、果実、菓子類、酒類が伸びている。特に酒類は、2008年3月以降の酒税撤廃・低減措置（アルコール度数30%未満の酒類は免税に）以降、需要が拡大しており、日本の地酒の輸入量が増えている。

香港の食品市場を概観すると、特に外食市場の規模が大きいことが分かる。1人当たりの年間外食消費額は円換算で12万円超（2011年）、これはアジアにおいては日本（同約18万円）に次いで多く、世帯当たりの平均外食回数6.9回／週は、日本の約5倍に相当する。世帯当たりの家

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
総出展者数	339	365	503	607	741	888	1,110	1145	1182
日本出展者数	1	2	20	41	92	162	222	231	252
構成比（%）	0.3	0.5	4.0	6.8	12.4	18.2	20.0	20.2	21.3
来場バイヤー数	8,547	8,549	8,711	11,513	12,117	12,854	16,627	19,668	20,075
総来場者数	307,290	314,126	314,612	356,310	371,524	382,500	390,138	410,000	460,000



トレードホール内ジャパンパビリオンの様子

計支出に占める食費の割合でも、日本24%（外食5%、外食以外19%）に対して香港27%（外食17%、外食以外10%）、特に外食比率が高いことが分かる。外食市場における日本食レストラン数は、東日本大震災の直後に減少傾向に転じたものの、高級店を中心に再び増加傾向を見せており、全レストラン数の約10%を占め、中華料理、ファーストフードに次いで3位、外国料理の中ではNo.1の地位にある。日本食レストラン海外普及推進機構（JRO）が2009年に香港に支部を設立、昨年度はABC Cooking Studioも香港進出を果たし、現地の日本料理店協会や料理学校とも連動しながら、ホンモノの日本料理普及に尽力しているので、高級日本食材や調味料の需要も拡大傾向にあるといえる。

居住空間が狭く、厨房や冷蔵庫も小さい香港人家庭においては、相対的に内食需要が小さく、食糧を大量にストックする習慣はない。加えて新鮮な食材が常に入手できる香港においては、日本同様ウォルマートやカルフールといったハイパーマート業態が成功しなかった。一方で、世界中から集まる高級食材や有機栽培農産物を扱う店舗は増加しており、特に贈答用途やホームパーティに使われる食品に対するニーズが高まっている。具体的には、日本の高級果物（メロン、イチゴ、ブドウ、モモなど）や著名スイーツや菓子に注目が集まっている。通販やネット販売で日本食品を専門に扱う会社も人気を博しており、航空便を利用し、北海道産のカニや青果物を宅配するビジネスも業容拡大中だ。

また、一昨年、農耕機械メーカーであるクボタが香港に精米工場を立ち上げ、魚沼産コシヒカリを玄米の状態で輸入、精米したての新鮮な米を香港で販売する事業を開始している。新鮮かつ美味しい日本米が比較的手頃な価格で流通するようになったことが奏功、日本式カレーショップやおむすびのスタンドが多店舗展開しているほか、現地の人を対象にした日本式の手作り弁当教室が開かれるようにもなっている。

日本食品の海外における展開においては、「汎用化」、「現地化」、「日本化」の三つの方向性があると考えられるが、素材に近いものであればあるほど、「汎用化」と「現地化」の可能性が高い。「汎用化」というのは、使用用途が広いという意味で、「何にでも使える」ということを指す。和食に限らず、中華や洋食など幅広く使用される調味料の「味の素」（グルタミン酸ナトリウム）やキッコーマンの醤油はこれに当たる。「現地化」というのは、現地独特の使い方や調理方法、食べ方のことで、佃煮を「テリヤキフィッシュ」と銘打ち、ご飯ではなくパンに挟んで食べるのは「現地化」の一例である。また、広東料理の高級店で、みりんをチャーシューの「てかり」を出すのに使うというアプリケーションもある。「日本化」というのは、文字通り食べ方まで含めて日本流のスタイル、つまり日本文化そのものを売り込む方法である。寿司や刺身、天ぷらは、かなり海外でも認知度が高いと考えられるが、「焼餃子」や「博多ラーメン」なども、「日本的なもの」として香港のみならず中華圏に「逆輸入」され、好評を博していることはよく知られている。「大阪王将」は日本式餃子を標榜して香港人に愛され、「味千」、「一風堂」、「一幸舎」、「一蘭」などの豚骨ラーメンや「リンガーハット」の長崎ちゃんぽんは行列ができるほどの人気ぶりだ。

以上のように、日本食品にはまだまだ多様な可能性がある。厳選された素材、あくなき美味しさの追求、絶妙の食感や舌触り、徹底した品質管理に至るまで、丹精込めたものづくりの妙は農林水産業や食品加工業でも如何なく発揮されている。「安全」、「安心」、「健康」、「美味」と四拍子揃った日本食品は、少子高齢化で縮小する国内市場から、大きな潜在力を秘めた海外市場にその活路を見出そうとしている。人口僅か710万人ながら年間6000万人を超える観光客が訪れる香港（2014年度実績）は、参入障壁が低く世界中から高品質の食品が集結する「美食の都」であり、前述のとおり7年連続で日本食品最大の輸出先であることからも考えて、計り知れない戦略的重要性を秘めているといえる。世界の縮図ともいえる香港は競争も熾烈な市場であるが、貪欲なバイヤー、グルメな消費者は常に新しいものを求めており、香港の展示会は世界中の売り手と買い手が出会う場としての役割を担い続けている。但し、留意しなくてはならないのは、大型の国際展示会であっても、1回の出展で成果が出るとは限らないということ、更には、展示会においてバイヤーが見つけることはゴールではなくスタートであるということであろう。

ガラ・ディナーのメニュー。毛蟹とトマトのシンフォニー（左上）、鶏の西京漬け入り松茸スープ（右上）、すきやき風鍋（右下）、アワビ、ホタテ、海ブドウの刺身・寿司盛（中央）、黒豆・マンゴ・白桃のデザート（左下）

香港最大の映画の祭典、香港電影金像奬

映画ライター　浦川　留

香港では毎年3月から4月にかけて、映画ファンのテンションが最も上がる季節を迎える。大きなイベントの1つが香港国際映画祭、そしてハイライトとなるのが香港電影金像奬の授賞式だ。香港電影金像奬（以下、金像奬と書く）の英語名称は「Hong Kong Film Awards」だが、日本では「香港（版）アカデミー賞」と紹介されることが多い。伝統・ステイタス・華やかさともに香港を代表する映画の祭典である。

香港映画といえば一般にはカンフー、キョンシー、コメディ、あるいはポリス映画や黒社会映画のイメージが強いだろう。ただし近年は中国映画界との垣根が以前よりはるかに低くなり、台湾も含めてスターやスタッフの融合が進み、地域で分けずに“中国語映画”あるいは“中華圏映画”と呼ぶほうがしっくりくるような合作映画がジャンルを問わず増えている。

たとえば今年の金像奬で作品賞にノミネートされた映画のうち、陳可辛監督の「親愛的（原題）」は物語の舞台が中国本土、メインキャストはみな中国のスター、当然ながら劇中の言語は普通話で、香港らしさを感じさせる要素はほとんどない。対照的に、陳果監督の「ミッドナイト・アフター」は香港的喧騒とバイタリティに満ちたローカル色ゆたかな広東語映画である。

では何を以て金像奬の選考対象（すなわち香港映画）とするかというと、監督が香港居民であるとか、香港の製作会社が投資している等の項目の中から所定の基準を満たしていればよい。逆にその基準に満たない場合、監督が香港居民で香港の資本が入っていても金像奬とは無縁である。今回の金像奬でいうと、昨年末に中国で公開され話題を呼んだ徐克監督の「智取威虎山（原題）」は、作品のクオリティとしては金像奬になんらかの項目でノミネートされてもおかしくないが、香港では未公開（今後公開の可能性もあるが）のため賞レースには参加していない。

昨年の香港電影金像奬の豪華パンフレット。場内配布のほか、書店やコンビニ等で販売される

ともあれ、こうした製作環境の変化や作品の多様化にともない、金像奬の授賞式では司会者やプレゼンターが広東語と普通話をおりまぜて進行し、受賞者が普通話で挨拶する光景も毎年のように見られるようになったのが近年の傾向だ。

金像奬が始まったのは1982年。第1回目は作品賞、監督賞、脚本賞、主演男優賞、主演女優賞の5部門でのスタートだった。第2回目から助演男優、助演女優、新人俳優、撮影、編集、美術、アクション設計、音楽、歌曲が加わってほぼ体裁が整い、現在はさらに衣装デザイン、音響効果、視覚効果、新人監督、両岸華語電影（中国本土および台湾の映画）も含む19部門となっている。

その中で、アクション設計（日本でいえば殺陣にあたる）の項目にちょっと注目していただきたい。「一番のアクションシーンを手がけたスタッフ」をたたえるというのは、本家アメリカのアカデミー賞にもない、アクション映画のメッカ香港が創出した賞なのだ。

70年代に李小龍とそれに続く成龍の登場で世界的に知られるようになった香港のアクション映画は、もっと前からの長い伝統があり、武術家や京劇学校出身者が劇中の武術指導を行うとともにスタントマンや役者を兼ねていた。そうやって現場経験を積み、やがて監督としても大成したのが袁和平、成龍、洪金寶、程小東といったヒットメイカーたちである。彼らはみなアクション設計の大御所として金像奬ノミネートの常連でもあって、昨年「グランド・マスター」で同賞を受賞した袁和平は、今年も黄精甫監督の「悪戰（原題）」でノミネート。また、陳徳森監督の「一個人的武林（原題）」でノミネートの甄子丹は、かつて袁和平に見出されて映画界入りした、いわば第二世代。洪金寶や程小東の現場で鍛えられた世代も第一線で活躍している。

オスカーであれカンヌであれ、映画賞の主役はなんといっても作品、監督、および主演男優と主演女優。その中でアクション関係の賞ははっきりいって地味な存在ではあるが、今やハリウッドにも定着した香港式アクションのオリジナリティを象徴するユニークな映画賞であることを記しておこう。

第34回目となる今年の金像奬は、4月19日に授賞式が行われる。インターネットの普及のおかげで海外でもリアルタイムに情報を得られるようになり、当日の夜は日本でも香港映画好きがツイッターなどで大いに盛り上がるはずである。

賞のゆくえは、接戦となって複数の作品が賞を分け合う年もあれば、一作品に賞が集中する年もある。前回（2014年）は王家衛監督の「グランド・マスター」が作品賞、監督賞、主演女優賞を含む全12部門で受賞し、記録的な大贏家（大勝ち）となった。今年はどの映画が、どの監督が、どの俳優が金像奬の歴史に名を刻むことになるだろうか。

浦川留／映画ライター・中文翻訳　香港映画をはじめ台湾、中国、タイ、インドなどアジア映画好き。著書『香港アクション風雲録』（キネマ旬報社）、共著書『武侠映画の快楽』（三修社）、訳書『荊軻』（講談社）など。

スタンダードチャータード香港マラソン

田村　早苗

香港の大通りが市民ランナーで埋め尽くされる一大イベントが、年1回開催される香港マラソンです。香港の中国回帰を記念して、1997年にスタンダードチャータード銀行がスポンサーとなったのが第1回大会で総参加数は1000人程度。香港と深圳を結ぶコースで始まりました（チャータードがスポンサーになる前にもこのコースでのマラソン大会は行われていたようです）。

青馬大橋から新空港周囲（1998年）、セントラルから深水埗（1999年）などコースは何度か変更を経ていますが、現在は九龍尖沙咀（ネイザン道）をスタートしてハイウェイを通り、西区海底トンネルを抜けて香港島でゴール、というコースがほぼ定着。ストーンカッターズ橋開業後は「3つの橋と3つのトンネル」を通るユニークさが売り物で、香港市民には「チャーターマラソン」の名称でおなじみの行事となっています。

急坂を登って向かう橋部分は海抜が最高約70ｍ、逆に海底トンネルは地下30ｍ。この100ｍの高低差に加えて香港島ではオーバーパスとアンダーパスを上ったり下ったり。タフなコース設定はランナー泣かせです。どのコースも早朝からスタートし、行程の大部分は一般歩行者の入れない自動車専用道ですから、「にぎやかな沿道の応援」はゴール直近までほとんどなし。給水所ボランティアの声援だけを頼りにただひたすら走るという、これまたランナーには厳しい環境のレースです。

■フルマラソン（全馬：42.195キロ）：ミラホテル～オースチン駅～ストーンカッターズ橋～南湾トンネル～青馬大橋～汀九橋～長青トンネル～西区海底トンネル～セントラル（IFC2）～湾仔（バウヒニア広場）～ヘネシー道（そごう）～ビクトリア公園

■ハーフマラソン（半馬：21.0975キロ）：スタート後、オースチン駅を通りハイウェイへ。青馬大橋手前で折り返し西区海底トンネル～以降フルマラソンと同じ

■10キロマラソン（10公里）：香港島北角をスタートして東方向へ～筲箕湾で折り返し、東区走廊からビクトリア公園へ向かう。九龍サイドは通らない

スタート前。早朝のネイザン道がランナーで埋まる

海外からの招待選手も参加し、優勝賞金（フルマラソン1位はUS$65,000）も出る大きなレースですが、主役はやはり香港市民。ふだん歩いては通れない道を走れる興味と昨今の健康志向からか、年ごとに参加者数は増加の一途をたどり、2015年は総数7万人を突破しました。申込みは先着順のため、エントリー開始日は朝からパソコンの前で受付開始時刻を待ち構えます。すごい勢いで参加枠が埋まっていくそうです。一番の人気は10キロレース。2時間以内に走り終えればよいので、ウォーキング感覚で参加する人も多いようです。

コース最初の難所、坂を登ってストーンカッターズ橋へ

マラソンに参加しない人にとって、この日の香港はとても動きにくい街です。主要道路は早朝から通行止め等の規制が入り、路線バスの運休も多数。九龍側の規制は午前中でほぼ解除されますが、香港島側は午後になっても渋滞が続き、車での移動は時間がかかります。銅鑼湾周辺は歩行者の通行もかなり制限を受け、毎週日曜にビクトリア公園で休日を楽しむメイドの人たちも、この日はとても窮屈そう。

今年の大会は、例年の「農暦新年（旧正月）の2週間後」という日程の目安を大きく前倒し、1月25日に開催されました。2015年は農暦新年が2月19日と遅く、その2週間後は3月に入ります。気温と湿度がぐんと上がる香港の3月は、ランナーがいつ熱中症を起こしても不思議でない状況。実際に2月末に開催された2010年大会では多数のランナーが熱中症による不具合や脱水症状を起こし、問題となりました。運営側もあの騒ぎを繰り返したくない思いが強かったのでしょう。

私は2004年にこの大会の存在を知り、10キロレースにエントリーしてから練習開始。生まれて初めてのマラソンでした。その後ハーフ、フルと距離を延ばしながらほぼ毎年参加しています。今年もフルマラソンに参加しましたが、開催前に傷めた膝に炎症があり、25キロ通過地点で棄権。リタイヤ者を収容するシティバス（城巴）に乗ってしまいました。今年から銅鑼湾そごう前の大通りを走れるようコースが微修正されたので楽しみにしていたのですが、体をだましながら完走できるほど香港のコースは甘くありません。

大会は来年、第20回を迎えます。この節目を楽しむため、また今年の雪辱を果たすためにも、ぜひ参加したいと思っています。

田村早苗／編集者・フリーライター。香港巴士鐵路旅遊協會秘書長。著書に『香港・街歩きの広東語』（三修社・共著）、『香港ストリート物語』（トキメキパブリッシング）での香港街道地方指南編集部取材記など。

香港の宿

日本香港協会理事　塚本　勝弘

私が初めて香港の地に足を下ろしたのは、今を去る半世紀前1964年の初夏5月下旬のある日の夕刻であった。旧啓徳空港はその後数次にわたる増改築を繰り返し、赤鱲角の新国際空港に移転する直前には、かなり大規模な構築物と化していたが、当時は恐らくその第一段階の極く質素でささやかなものであった。

迎えの車に乗せられて、市街地（とは言っても、香港の場合世界中の他都市と違い、空港の所在地も都市郊外ではなく市街地の真っただ中だが）へ向かい、くすんだどうやら工場と住宅の混在するらしい区画（今振り返ってみれば多分土瓜湾道や馬頭囲道周辺だったのだろう）を通り、右手のやや小高い所に白い瀟洒な建物群（伊利沙伯医院）を目にしながら暫し走っている内に、人通りの多い一角にある目的地に着いた。彌敦道の南端尖沙咀に鎮座する「重慶大厦」である。

赴任前一年余り、国内で香港との取引を担当した。専ら航空郵便の往来に依る交渉で、現地の実情は見たこともなく唯単に空想の域を出なかった。少少遡った時点に香港を通過した先輩から“香港にはGuest House（漢字では招待所）と称する簡便な宿泊設備がある”と聴かされた記憶はあった。それと、香港が海に面した土地（僅かな距離にせよ大陸とは切り離された独立の島とは知らなかった）であるとのおぼろげな知識を総合して、なんとなく海辺にひっそりと建つ比較的小型の低層構造物を頭に描いていた。あに図らんや、喧噪たる繁華街に立つ巨大なビルではないか。当時、日本では東京ですら高層といっても精々7～8階、10階を超える建物は存在しなかったから、正直言って度肝を抜かれたのは事実である。名前は「重慶大厦」、勿論初めて目にしたが、決して後代旅行案内書の類で喧伝される“伏魔殿”のいかがわしい様相は感じられなかった。

以下は、比較的人口に膾炙する某ガイドブックの重慶大厦の紹介記事の抜粋である。“ネイザン・ロードのインペリアル・ホテル（帝国飯店）とホリデイ・イン・ゴールデンマイル（香港金域假日酒店）の間にある名物安宿ビルだ。17階建てのビルの中に、個人経営の宿がぎっしり。宿泊客は黒人・白人、洋の東西を問わずあふれている。宿のタイプは日本の民宿やヨーロッパのオステルといった感じ。以前は犯罪の温床ともいわれたが、現在では治安改善に力を注ぎ、多数の監視カメラを設置、警察官の巡回を強化、入口にはシャッターが付けられた”。

ところで、この重慶大厦に対応する英文表記は「Chungking Mansions」であるが、中国広しといえども一体どの地方の発音に基因しているのか？かねてから頭を悩ましている課題である。場所柄、本筋の広東語だとすれば「Chunghing Mansions」とすべきであるし、北京語なら「Chongqing Mansions」となる。第二次世界大戦後、中華人民共和国の成立を挟んで中国各地からの避難民が香港に殺到したから、このビルの創設者の出身地の方言かと推測される。国共内戦で敗退した蔣介石率いる国民党政権の最後の拠点は四川省重慶であり、主力は台湾へ脱出したが一部残党が香港の当時は人跡稀ともいうべき九龍半島の最東部の一角に青天白日旗を掲げて立て籠もった。この事実から推測すると、本当に重慶出身者でなくても一時居住した土地の記憶を留めるための命名だった可能性はある。

さて、本人の意思如何に拘わらず取敢えず旅装を解いたのは、同ビルの差ほど高くない多分5～6階に位置した「Mandarin Guest House」(対応する漢字表記もあった筈だが、一向に記憶が無い)の一室である。およそ3畳ほどの長方形の部屋で、一方の壁際に寄せてシングルベッドが置かれ、反対側の一角に簡素な机が1脚。入口の正面反対方向にガラス窓が設けられていたので閉塞感はない。便所とシャワー室は廊下を隔てた室外で他の宿泊者数名との共用。それ以外に全員を対象とする食堂があり、朝・昼・夜随時希望に応じて軽食が提供されていたし、有料のクリーニング・サービスもあったので、外へ出なくても最低限の日常生活は可能であった。基本的宿泊料はHK$450／月で、これに食事代とクリーニング代の実費を加算した合計額を一括して月に一度の支払いで事足りたから極めて便利であった。

かくして、逗留が長引くにつれ食事時に顔見知りになる人が徐々に増えて行き、なんとなく言葉を交わすようになる。その結果、分かったこと大体は市場開発を目的とする長期滞在者か私のような単身赴任者である。つまりは、数多くある招待所の中でも此処は割合程度の良いクラスで、ホテルに準じる生活の確保を目指していたものと見える。一方、招待所の中には長期滞在者など殆どおらず、ラブホテルの代行まがいのチョイノマ稼ぎを主力とする向きもあるやに聞いた。正しく、清濁渾然一体な香港社会の一面といえよう。

香港の招待所を足がかりにして、街歩きのだいご味を喧伝したのは恐らく沢木耕太郎の『深夜特急』に違いない。事によると、彼が逗留した招待所を収納する雑居ビルも重慶大厦ではなかったかと、数十年ぶりに読み返して見たが諸般の設定条件から、それは私の憶測の域を出ないと断定せざるを得ない。但し、彼に倣って当時の重慶大厦の周辺に足を伸ばしてみよう。正面入り口前を走る彌敦道を左方向に進むと、さしたる距離を置かず鉄道線路にぶつかる。つまり、当時は九広鉄道の始発駅がスターフェリーの直ぐ脇、現在の香港文化センター所在地にあり、線路の右手はビクトリア港の海上という地形だった。ビルの直ぐ左隣は先程のガイドブック記載の通り、Imperial Hotelそして Ambassador Hotel。その先の現在Sheraton Hotelが建っている場所はオープンスペース式の駐車場で、その脇を線路に並行して梳士巴利道が走っている。ビルの左斜め向こう側にHyatt Hotel、一寸間隔を置いて一番海際にPeninsula Hotelと云った構成であった。

香港春節レセプション2015開催

日本香港協会　全国連合会

香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部（香港経済貿易代表部）、香港・日本経済委員会、香港貿易発展局は毎年恒例となっている「香港春節レセプション」を、2月26日（木）帝国ホテル東京の富士の間にて開催いたしました。

香港政府観光局、香港投資推進局（インベスト香港）、日本香港協会全国連合会といった香港関連機関の後援を得て開催され、会場には日本の政官財学、各種団体や報道機関などから総勢450名以上が集い、昨年同様大規模なレセプションとなりました。

最初に香港を代表して、香港経済貿易代表部の黄碧兒首席代表が開幕の挨拶に立ち、「一国二制度」の独自の強みを持つ香港は、中国本土市場へ進出しようとする日本企業にとっての“スーパーコネクター”となり得ること、また、その戦略的な位置、優れた金融とビジネスサービスで、香港は東南アジアや世界のその他の地域への“スーパーコネクター”でもあることも強調されました。さらに香港は国際的なビジネスおよび金融の中心地であることは良く知られていますが、芸術や文化が花開く都市でもあることを強調されたほか、日港間の増え続ける観光客数、ビジネスなどから香港と日本の強いパートナーシップを強調されました。

続いて香港・日本経済委員会委員長で、香港中華総商会名誉会頭を兼任する蔡冠深新華集団会長が歓迎の挨拶を述べました。次に、日本香港友好議員連盟副会長の羽田雄一郎氏から来賓を代表して挨拶を頂きました。

ご挨拶に続き、中華人民共和国駐日本国特命全権大使程永華氏が壇上に上がり、主催者代表と来賓代表をバックに盛大な乾杯の音頭を取ると、場内は春節の祝いにふさわしい、満場の拍手に包まれました。

お食事が始まりゲストの皆様の歓談される中、今年の春節レセプションのパフォーマンスとして獅子舞が横浜中華学校校友会国術団の皆様により披露されました。

後半は、香港貿易発展局東京事務所の門田弘蔵次長より、同局の組織・事業概要や、同局が香港で主催している業界内で世界最大規模の展示会についての紹介がありました。

最後に香港貿易発展局の古田茂美日本首席代表が、香港と日本のさらなる交流拡大を願う閉幕の挨拶を行い、今年も香港春節レセプションが盛大に幕を閉じました。

中華人民共和国駐日本国特命全権大使程永華氏の音頭で乾杯

TOKYO

NPO法人日本香港協会

NPO日本香港協会【女子プロジェクト】バウヒニア会

◆第13弾イベント「香港風火鍋の会」　開催レポート

日時：2015年1月28日（水）19:00～21:30

場所：中華居酒屋　佳陽

香港や中国では四季を通じて火鍋をしますが、冬場は特に頻繁に鍋を囲みます。広東語で「打邊爐（だーびんろう）」といえば火鍋をするということ。旧正月を目前に控えた1月下旬、総勢約30名で私たちも熱い火鍋を囲んでバウヒニア会・食のイベントを開催いたしました。

香港からの“お取り寄せ”火鍋材料

今回は、サテ味スープ、皮蛋や香草を使ったスープの香港風火鍋です。鍋の材料も生根や枝竹などを香港から取り寄せました。お鍋の具材が煮える間、バウヒニア会メンバーからの香港風火鍋の説明、続いて乾杯。

今回は男性の参加者も多く、賑やかに盛り上がりました。香港や上海出身の参加者からも、本場の味に近い！と好評でした。シメには、これも香港から取り寄せた伊麺で。日本ではなかなか出会えない味を堪能しました。

NPO日本香港協会女子プロジェクト「バウヒニア会」では、食に関するイベントや懇親会、女性を中心としたビジネス交流会、香港の旅に関するイベント、中国茶教室などを開催しています。今後、香港のエンタメに注目したイベントなども予定しています。

ウェブサイト：

http://www.jhks.gr.jp/tokyo/bauhinia.html

facebookにも是非アクセスして下さいね！

https://www.facebook.com/bauhinia.tokyo

KANSAI

関西日本香港協会理事・事務局長　戒田　真幸

“think GLOBAL, think HONG KONG” 国際化へのパートナー：香港 in 大阪

去る1月28日に大阪商工会議所において香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部、香港貿易発展局主催により掲題特別シンポジウムが開催され、大阪商工会議所と関西日本香港協会が共催支援しました。このイベントは、世界経済の約3割を占めるアジアの中心に位置する香港から多数の官界・財界人が来阪し、大物華人と関西の著名な財界人が集結して日本と香港間の産業協力関係をアジア経済推進の重要な動力にすべく、様々なセッションを通じて世界市場の動向や課題が討議され、当日は延べ801名が参加して大盛会となりました。

午前中に開催されたメインシンポジウムでは、香港貿易発展局総裁マーガレット・フォン氏が主催者挨拶、香港特別行政区政府商務経済発展長官グレゴリー・ソー氏と大阪商工会議所会頭佐藤茂雄氏が歓迎挨拶、大阪府知事松井一郎氏が来賓挨拶を行い、香港の恒隆不動産代表取締役社長フィリップ・チェン氏、中国銀行（香港）副頭取ホアン・ホン氏が“think GLOBAL, think HONG KONG”をテーマに講演し、新関西国際空港株式会社代表取締役社長安藤圭一氏と丸紅株式会社執行役員大阪支店長橋本雅至氏が「香港を活用したグローバルビジネス：日本企業からの視点」について講演しました。

午後の分科会では、食品セミナーでは関西の「うまいもの」や食文化を、香港を通じて海外展開するための市場情報やサクセス・ストーリーを紹介、テクノロジー（環境）セミナーでは香港・中国への環境保護技術及び関連テクノロジーの輸出や技術移転について最新の情報を紹介、コンテンツセミナーでは「クールジャパン」をテーマに書籍・漫画、映像、ライセンスに焦点を当て、香港市場の最新動向を紹介、3つの分科会で講演とパネルディスカッションが実施されました。

この一大イベントをきっかけに香港と関西の経済交流が更に活発化することでしょう。

チャイニーズ・ニュー・イヤー・パーティー2015

関西日本香港協会は、例年2月に総会とチャイニーズ・ニュー・イヤー・パーティーを開催していますが、今年は1月28日に開催された特別シンポジウム“think GLOBAL, think HONG KONG”のイベントを最後に盛り上げるためにヒルトン大阪で同日開催し、香港からの来賓、関西の官界・財界の代表、多数の協会会員合計124名の参加者を得て大変盛り上がって有意義なパーティーを実施することができました。

「think GLOBAL, think HONG KONG in Osaka」メインシンポジウム

香港からの来賓ジョナサン・チョイ氏の音頭で乾杯

パーティーは木全千裕会長の挨拶で始まり、香港貿易発展局総裁マーガレット・フォン氏が歓迎の挨拶をされ、香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部の首席代表サリー・ウォン氏の来賓挨拶に続いて香港・日本経済委員会の委員長ジョナサン・チョイ氏が乾杯の音頭を取られました。会食はヒルトン大阪の中華料理「王朝」の旧正月特別料理を楽しみ、参加者の皆さんの積極的な交流で親睦を深めました。

今年のアトラクションは、当協会の会員で香港他アジアのライブで人気急上昇中のジャズ歌手、青紀ひかりさんに歌っていただきました。青紀ひかりさんは昨年11月に香港の道路名をタイトルにしたアルバム“Ice House Street”をリリースし、2月に香港と台湾で同アルバムリリース記念ライブを実施しました。同アルバムの曲を含めてジャズを数曲歌い、最後にアンコールに応えて中国や香港で大人気の「月亮代表我的心」を歌って会場の雰囲気を盛り上げてくれました。

今年も協賛企業や会員の皆さんから提供されたたくさんの景品のラッキードローを楽しみ、最後に田中義次副会長の閉会挨拶で楽しかったパーティーを閉会しました。

旧正月を祝う赤いドレスで歌う青紀ひかりさん

中京日本香港協会事務局長　佐藤　亮一

2015年年頭所感及び総会、セミナー、春節パーテイーについて

恭喜發財！

ウェザーニュースの情報によれば、今春の桜の開花は平年より早め、中京地区も3月下旬と前倒しのようです。北陸、九州では、「春一番」が吹き昨年3月より一週間程早い気候が見られるとの事。毎年の事ながら季節の変わり目が年々速く感ぜられるのは加齢の所為か？毎年の繰り返しながら月日の経つのは年ごとに感ずる「花、鳥、風、月」の世界。花（20代－四季の花華を愛でる）鳥（40代－鳥の囀りで目が覚める日々）風（60代－風の東風、西風で季節を知る）月（80代－月を見上げ五感で風流を感じお迎えを待つ）の日本古来独特の季節感を個人的にだが記しました。

本年中京日本香港協会は、中国春節に並び新年のパーティーを総会の開催と同時に2月16日（月）実施しました。

今年も羊干支を唱う豊島会長の挨拶に始まり、平成26年度の事業報告、平成27年度の事業計画ならび決算総括の議事等、理事全員参加のもと確認承認され、本部より首席代表古田茂美氏始め関係諸氏出席を賜り、新しい2015年中京日本香港協会が出発した次第です。創設来25年の今年です。

総会の後、引き続きセミナー会場にて78名参加の中、講演第一部古田茂美講師により演題「最近の香港経済状況」の講演を戴き貴重な資料も全員に配布され、各企業、官庁、会員など熱心な聴講者で盛況でした。講演第二部は豊島徳三（長者町おじさん）講師により、演題「なごやのあきんど史」にてなごや知識人として軽妙な話術も伴い、特に松坂屋創成伊藤家に関して色々資料の展示含め愛知、岐阜、三重など東海地区の話題にも触れ、我々の知らない時代考証から名古屋にまつわる歴史も多く提供いただき好評でした。その後、18時よりパーティー会場にて名刺交換会及び新年を祝う親睦会が催されました。来賓挨拶として香港経済貿易代表部サリー・ウォン首席代表、中華人民共和国駐名古屋総領事館葛広彪総領事、大村愛知県知事の祝電など盛大な運びとなりました。式次第は進みアトラクション（中国技芸ほか）に加え、全員に当たる好評の抽選会も香港往復航空券（キャセイ航空提供）始め多くの景品（理事又企業からの協力）で賑わいました。上記のごとき新年の行事を無事終了できたのは香港貿易発展局、各理事によるものと感謝する次第です。

香港貿易発展局古田茂美日本首席代表の音頭で乾杯

中国技芸のアトラクション

日本香港協会　全国連合会

〒102-0083　東京都千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局　東京事務所内
電話（03）5210-5901　FAX（03）5210-5860

NPO法人日本香港協会（東京）
〒102-0083　千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内　電話（03）5210-5870

関西日本香港協会
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13　大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内　電話（06）4705-7030

中京日本香港協会
〒460-0003　名古屋市中区錦2-11-27　TH錦ビル8階
株式会社喜斎内　電話（050）3620-2517

九州日本香港協会
〒812-0011　福岡市博多区博多駅前2丁目9-28　会議所ビル1階
地域企業連合会　九州連携機構 内　電話（092）451-8610

山形日本香港協会
〒990-2432　山形市荒楯町1-14-21
（株）日本不動産コンサルティング内　電話（023）633-2110

北海道日本香港協会
〒060-8661　札幌市中央区大通西3-11
北洋銀行国際部内　電話（011）261-4288

宮城日本香港協会
〒980-0811　仙台市青葉区一番町3-7-23　明治安田生命仙台一番町ビル3階
（株）JTB東北　交流文化事業部内　電話（022）212-5552

沖縄日本香港協会
〒900-0033　那覇市久米2-2-10
那覇商工会議所内　電話（098）868-3758

広島日本香港協会
〒730-0052　広島市中区千田町3-7-47　広島県情報プラザ3階
（公財）ひろしま産業振興機構　国際ビジネス支援センター内
電話（082）248-1400

新潟日本香港協会
〒951-8052　新潟市中央区下大川前通四ノ町2186番地
愛宕商事株式会社内　電話（025）365-0001

URL　http://www.jhks.gr.jp

九州日本香港協会事務局

2015年春節シンポジウム＆パーティー開催

今年度、5周年を迎えた九州日本香港協会では2月25日(水)に、香港貿易発展局を後援とし2015年春節シンポジウム＆パーティーを開催した。第1部のシンポジウムは『珠江デルタ地域経済の発展と九州の連携の展望～香港マカオの歴史遺産観光学およびホスピタリティ観光学を中心に～』と題して、電気ビルみらいホールで、過去最大286名の参加者のもと盛大に行われた。

石原会長による開会挨拶のあと、四つの基調講演を行った。香港・日本経済委員会ジョナサン・チョイ委員長は『九州とアジアの未来～観光、文化、学術、経済貿易投資面から』と題して、里見晋長崎県副知事は『長崎の歴史遺産を活用した交流拡大～孫文と梅屋庄吉、長崎の教会群』と題して、マカオ大学工商学院ジャッキー・ソー院長は『マカオにおける孫文研究』を、マカオ大学工商学院ホスピタリティ＆ゲーミング学科グレン・マッカートニ教授は『マカオにおけるホスピタリティ観光学とは何か』を題としてお話頂いた。講演では、カジノ（ゲーミング）産業からヘリテージツーリズム（歴史遺産観光）や文化を中心とした観光へ主軸を移しつつあるマカオの事例を紹介して、九州もマカオと同じように、歴史文化にまつわる遺産を使った観光の活性化が重要となることを中心に語られた。

講演の後、パネルディスカッションを行い、パネラーとして香港・日本経済委員会ジョナサン・チョイ委員長、九州観光推進機構石原進会長、マカオ大学工商学院ジャッキー・ソー院長、マカオ大学工商学院ホスピタリティ＆ゲーミング学科グレン・マッカートニ教授、元長崎国際大学片岡力教授、北九州市立大学大学院マネジメント研究科王効平研究課長／教授、香港貿易発展局古田茂美日本首席代表、有限会社日比谷松本楼小坂文乃代表取締役副社長に登壇いただき、九州経済調査協会森本廣理事長がモデレーターを務めた。

パネルディスカッションでは「孫文トレイル九州やIR（統合型リゾート）を作ってアジアの観光客を呼ぶ」、「九州の魅力の温泉、食、自然にヘリテージツーリズムを加えることは良いが、政治的に注意が必要」、「マカオのゲーミング大手は莫大なIR投資をしている」「マカオはゲーミング産業のネガティブなイメージもある。若者や高齢者世代に歴史遺産などをアピールする必要がある」「マカオはここ15年、観光客が増え、建設業も好況。一方で地価が跳ね上がり、格差解消が課題となる」「長崎ハウステンボスはキリシタン文化遺産をベースとしたIRを推進している」「ツーリズムは観光客を呼ぶだけではなく、関連産業が全体的にお金を稼ぐビジネス」「東京オリンピックの勢いと共に温泉を基軸とした日本食、自然、歴史を訴えて九州のブランドイメージを向上する」「孫文という国際貿易文化財（ナショナリズムを超え、大きなインパクトのある）を活用し、アジアと日本を繋ぐ地理的に必然な運命を果たすこと」など活発な意見交換が行われた。最後に、九州経済連合会中川正裕専務理事より「九州の今後の発展には古代東アジアの中での日本のように華人ネットワークを強化していく必要がある」と閉会挨拶を述べた。

シンポジウム終了後、第2部の春節パーティーを開催した。128名が参加しての活気あるパーティーであった。石原会長による開会挨拶のあと、中国駐福岡総領事館張梅副総領事、服部誠太郎福岡県副知事に来賓挨拶を、ジョナサン・チョイ委員長に乾杯のご発声を頂いた。また、パーティーの後半では、今回ご多忙の中九州にお越しいただいたジョナサン・チョイ委員長やマカオ大学のソー院長、マッカートニ先生に感謝の意を込めて、石原会長から記念品（九州に関する写真集など10冊）を贈呈した。毎年恒例のラッキードローでは㈱ニューオータニ九州よりご提供の「Weekend Dinner Pairお食事券」とキャセイパシフィック航空会社よりご提供の「福岡－香港往復ペアチケット」が当たり、会場は大いに盛り上がった。最後に三輪副会長よりご挨拶をいただき、閉会となった。

今回のシンポジウムでは香港と九州との友好な関係（グワンシ）をベースに新たな地域マカオとのご縁を結ぶことが出来た。今後とも香港を主軸として九州日本香港協会はGreater Chinaとの華人ネットワークを広げていきたい。

パネルディスカッションの様子

シンポジウム記念写真

HOKKAIDO

北海道日本香港協会事務局長（北洋銀行国際部副部長）　矢嶋　洋一

「香港と北海道」
～協会設立10周年にあたって～

◆北海道日本香港協会設立10周年

北海道日本香港協会は、2005年12月1日に北海道と香港の文化・経済交流の促進を目的に設立され、今年10周年を迎えます。初代会長には、北洋銀行の高向頭取（当時）が就任し、代々当行役員が会長を務めているほか、国際部が事務局を担っております。

北海道日本香港協会では、毎年香港に関係するビジネスセミナーを開催、後援しているほか、「香港のつどい」という会員と香港との親睦交流会を行っています。

これまで、香港の政府機関や食品バイヤー、道内からの進出企業、大学教授など幅広い講師をお招きして、北海道と香港とのビジネス拡大に向けて様々なセミナーを行ってきました。また、「香港のつどい」では、道内企業からご協力をいただき、会場内に北海道を代表するお菓子や日本酒、ワイン、乳製品を提供するブースを設営するほか、香港フォーラムでもおなじみのコーラスグループ「ダンディーフォー」のステージやラッキードロー、過去にはミス香港にも参加いただくなど、毎年多くの皆さまに楽しんでいただいています。

「香港のつどい2013」
ダンディーフォーのステージ

◆香港貿易発展局（HKTDC）との提携について

協会の事務局を務める関係から、北洋銀行では、2009年11月に全国連合会の運営を行っている香港貿易発展局との間で、相互協力に関する協定書を締結しました。北海道と香港の貿易やビジネスの促進に協力するとともに、情報の相互共有や現地訪問時の協力を行うことにしています。2013年6月には、同局と協力して北海道では初めてとなる香港金融セミナーを開催しました。

また、昨年8月には香港FOOD EXPOに合わせて札幌市の上田市長が香港を訪問し、香港貿易発展局と協力の覚書（MOU）を締結しています。

◆香港と北海道の関係

⑴北海道から香港への食品輸出

香港は、日本の農林水産物・食品の輸出先としてトップシェアを占めています。2013年の速報値によれば、香港への食品輸出は1,250億円（シェア22.7%）と2位のアメリカ（819億円、シェア14.9%）を抑えトップを維持しています。

また、2012年の北海道からの食料品輸出品目でみても、香港へはナマコを中心に114億円（シェア31.8%）と2位の中国（112億円、シェア31.2%）を抑えてトップであり、北海道の海産物は現地で非常に人気があることがわかります。

現在、楽天やYAHOOがネット販売で海産物の宅配を行っており、非常に好調なようです。また、香港では、「おむすび」がブームになっており、北海道の米も消費拡大が期待されています。

⑵香港から北海道への観光客

東日本大震災によって減少していた香港人観光客も2013年度には10万人台に回復しています。キャセイパシフィック航空のほか、昨年12月からは、香港航空の直行便も週5日新千歳－香港間で就航し、ますます便利になりました。

北海道では、官民が連携して北海道国際輸送プラットホーム推進協議会を立ち上げ、北海道への香港観光客向けのサービスとして「海外おみやげ宅配便（HOP）」の推進に力を入れています。これは、北海道独自の取組みであり、観光客にとっては、北海道の美味しい食品をお土産としてご自宅まで「冷凍・冷蔵」の状態で航空輸送されるので、帰りの荷物が少なくて済みますし、取扱店舗にとっては持ち帰りの制約がなくなることで、客単価の引き上げが期待されています。

インターネットショッピングサイトもありますので、日本香港協会の皆さまも、このサービスを使って、香港に住むご友人に北海道の美味しい海産品やスイーツを贈り物としてお送りすると喜ばれるのではないでしょうか。【ホームページ】http://fresh-hokkaido.hk/

⑶まとめ

「食」と「観光」に取り組む北海道にとって、香港は食品の輸出先として、中国大陸や東南アジアへの窓口として、変わらぬ魅力を持ち続けています。北海道日本香港協会は、香港貿易発展局などと協力して、香港でのビジネス展開を検討している道内企業のお手伝いをしております。

10周年という節目に当たり、今まで以上に、北海道と香港双方の経済交流、友好親善関係を発展させていくために、引き続き、当協会の活動を広めていくよう微力ながら努めてまいります。

「香港のつどい2007」ミス香港も参加。中央が高向会長（当時）

MIYAGI

宮城香港協会　事務局　武田　功

2015春節セミナー＆パーティー開催

2月12日（木）「2015春節セミナー＆パーティー」をパレスへいあんに於いて開催しました。寒い中、100名を超す参加者を得て、香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部代表のウィニー・カン氏を来賓に迎え、盛大に開催することができました。

セミナーでは「日本食品輸出先としての香港の現状と展望」と題して、香港貿易発展局大阪事務所長の伊東正裕氏から講演があり、低税率であることやアジアのセンターに位置する地理的優位性、円安が追い風となり香港人の日本旅行（特に北海道と沖縄が人気目的地）がブームになっていること等について、具体的な事例を用いてご説明いただきました。第2部はパーティーです。花を添えてくださったのが、藤井かおる氏率いる5人のメンバーによるフラメンコダンス。華やかな衣装と足で床を踏み鳴らす独特の力強い踊りに会場も一変、飲む手も休め一時ダンスホールに衣替えしたような雰囲気でした。

ウィニー・カン氏と記念の1枚に（春節パーティー）

女性部会が香港文化教室を開催

12月12日（金）仙台市社会福祉プラザに於いて、本格的な「中国水餃子」づくりの料理教室を開催しました。餃子は、皮から作ることがなかなか経験できないため、それができるとあって、15名の枠がすぐにいっぱいになる程の盛況ぶりでした。家庭的な味でしかもヘルシーな水餃子、練った小麦粉をちぎり、手で押しつぶしながら麺棒で平らに、手で二つの作業をすることの難しさを体験、コツは調味料と具材を入れ同じ方向に混ぜ合わせることでした。皮の硬さの目安や茹で方など、いろんなポイントを学びました。

広東語教室で忘年飲茶会を開催

7月から始まった広東語教室が半年が経ちました。メンバーも当初6名でスタートしてから、今では12名と倍になり、荒川先生の情熱あふれる教師ぶりに、参加者にいつも笑いが絶えません。広東語を通じて香港人の明るい人柄に触れ、いつしか香港ファンになっています。12月16日（火）には先生の推薦もあり、広東料理で有名な「美香園」に於いて飲茶会を開催しました。みんなで笑いながら勉強、そして味見と、五感で感じながら、まるで香港で飲茶をしているような、実践さながらの忘年飲茶会となりました。

みなさん楽しそうですね。料理もおいしそうです（忘年飲茶会）

仙台空港国際化利用促進協議会が香港を訪問

11月19～22日仙台―香港線の定期便就航要請のため、香港の航空会社及び旅行会社を訪問するとともに、宮城・東北への観光誘致のため、関係機関を訪問しました。当協会の小野寺会長も参加し、香港・日本経済委員会委員長を務めるジョナサン・チョイ氏、香港貿易発展局国際本部長のウィリアム・チュイ氏等と懇談、定期便就航に向けた関係構築を図ってきました。

ジョナサン・チョイ氏と当協会小野寺会長も参加した訪問団の一行

沖縄日本香港協会　事務局

春節ランチョン開催

平成27年2月27日、ザ・ナハテラスにおいて、香港貿易発展局大阪事務所より伊東正裕氏、田中洋三氏をお招きし、沖縄日本香港協会役員との意見交換を目的とした「春節ランチョン」が開催されました。当日は、沖縄日本香港協会会長國場幸一（沖縄県商工会議所連合会会長）を始め、沖縄日本香港協会・役員10名が出席致しました。

冒頭、國場幸一会長が「昨年は、沖縄県と香港貿易発展局のMOU締結が実現しました。今後はこのMOUを具体的に実行していくことが重要」と挨拶しました。

伊東所長からは、香港貿易発展局および各地の日本香港協会の平成26年の活動報告が行われ、平成27年も香港貿易発展局が、沖縄日本香港協会の活動の支援を確認し、更なる活動の強化を図るとお話がありました。

役員昼食会

「新たなる香港ビジネスの挑戦」春節セミナー開催

平成27年2月27日、クラウンプラザ沖縄ハーバービューにおいて、香港貿易発展局、沖縄日本香港協会、那覇商工会議所の共催で開催されました。

冒頭、香港貿易発展局大阪事務所長伊東正裕氏より「日本食品輸出先としての香港」と題して香港で成功している食品・飲食店等の報告がありました。

続いてアジアビジネスコンサルタント代表の名城徹氏より、「食品を中心とした沖縄県産品の香港へのマーケティングについて」の報告がありました。

現在、沖縄から香港に輸出される物の中で、食品・農水産物が占める割合は高いが、「日本の食」としての安全・安心を確保しながら、沖縄独自の食品や食文化を広げていくことが重要であると感じました。

春節セミナー

セミナー終了後、懇親会が開催され、意見交換をしながら会員同士親睦を深めました。

香港航空貨物ターミナル社（Hactl）を見学

那覇空港では、今後予想される旅客・貨物需要に対応して、駐機場や旅客ターミナル・貨物ターミナルの機能の拡張が求められており、現在第2滑走路の工事が進められています。今回、沖縄県と共に香港国際空港、シンガポール・チャンギ国際空港の視察に同行致しました。

香港国際空港では、昨年キャセイパシフィック・カーゴターミナルが本格稼働しましたが、香港国際空港の開港時より稼働し、多くの航空会社が利用する香港航空貨物ターミナル社（以降Hactl）の重要性は変わることがありません。香港国際空港の航空貨物取扱量は、現在世界一であり、Hactlは、その約3割を担っているとのことでした。Hactlは、世界に通用する施設、効率の良いオペレーションと革新的なテクノロジーを持つ、世界有数の航空貨物ターミナル会社の一つであり、香港国際空港で唯一、中立な航空貨物ターミナルの運営者であり、どこの航空会社とも提携しておらず、全ての顧客航空会社に公平なサービスを行っています。

Hactlの特徴は、

- 1976年に運営を開始して40年以上の操業経験を持つ
- 世界に通用する施設とサービス（多層階の貨物ターミナルとして世界最大である。毎年350万トン以上の航空貨物を取り扱うことができる）
- 革新的なテクノロジー（ターミナル機能の一つとして、貨物追跡システムを持ち、取扱われる貨物をモニターし、管理するためすべての航空会社、貨物輸送会社、および関連する政府機関のためにデザインされている。毎日3,500件以上の利用と100万以上のデータ業務を取扱っている）
- 知識を持つ信頼出来るプロ集団である（2,500人以上の従業員のうち、ほとんどが10年以上、同社でのキャリアを持ち、顧客に高品質のサービスを提供できる）
- 継ぎ目の無い物流の連結性（中国本土間との特別な供給サービスを提供できる）

となっています。

実際に施設を見学し、その規模の大きさと自動化された搬入・搬送システムは、航空貨物取扱量世界一を実感するのに充分でした。

香港経済を支える巨大なロジスティックスの一部を体感することができ有意義な視察となりました。

香港国際空港貨物ターミナル

HIROSHIMA

広島日本香港協会　事務局

初めての海外取引セミナー＆相談会in尾道

平成23年度から、広島県東部福山市での「香港・アジアセミナー＆相談会」開催を皮切りに、昨年度は東広島市、今年度は呉市と、当協会会員の方をはじめ、県内の様々な地域の方々も事業に参加しやすく、またより多くの方々に香港の現況について見聞を広めていただけるように、「地域セミナー」を開催してまいりました。

今回、4回目として、当協会会員の尾道商工会議所との共催のもと、11月21日（金）に「初めての海外取引セミナー＆相談会in尾道」を開催いたしました。テーマは、前回の呉市開催時同様に、これから海外展開を考えておられる尾道地域の中小企業を対象とし、①海外取引に興味はありながら、何から手を付ければ良いのか分からない場合の初歩的なノウハウを伝授すること、②海外展開の事例紹介として、香港における日系企業の進出事例や最新の市場動向を紹介すること、と設定しました。当日は、専門家の講師が講演を行った後、個別相談会を実施しました。講師は、①については、独立行政法人中小企業基盤整備機構の太田光雄プロジェクトマネージャーに、②については、香港貿易発展局大阪事務所の田中洋三次長にお願いしました。

まず、中小機構の太田マネージャーからは、『初めての海外展開』と題して、輸出入のプロセスや決済時の注意点、貿易の基礎知識、知的財産権対策の実施などについて、事例紹介を交えた講演を行っていただきました。その中で、「海外展開・海外取引を行う際にはしっかりとしたリスクヘッジのもとで行う必要がある」との発言があり、これまでの豊富なご経験に裏付けされた大変説得力のある内容が印象に残りました。

続いて、香港貿易発展局の田中次長からは、「香港における日系企業の進出事例」と題して、香港の経済基礎情報と香港の強み、これまでの香港で成功を収めている日系企業の香港進出プロセスや、マーケティングの事例紹介、そして近年香港で課題となっている廃棄物処理問題など盛り沢山の内容を分かりやすく語っていただきました。

平日にもかかわらず多数の参加を得まして、参加企業の方々は、セミナー、相談会ともに大変熱心に聴講し、相談されておりました。

来年度についても、協会会員である各支援機関とも連携を図りながら、当協会事業を実施して参りたいと考えております。なお、香港貿易発展局大阪事務所の田中次長には、お忙しい中セミナー講師をお務めいただく一方で、事業企画段階から様々なアドバイスをいただきました。今年度の「地域セミナー」は、田中次長のご尽力なくしては実施できなかったものであり、紙面をお借りして厚くお礼を申し上げます。

「第15回香港フォーラム」「全国協会交流会」へ参加

去る平成26年12月１日・２日、「第15回香港フォーラム」「全国協会交流会」へ参加いたしました。昨年末、世界的に報道のあったデモ運動は心配されていたものの、特に目立った影響もありませんでした。当協会では、これらに併せて独自に協会会員から参加者を募り、在香港日本国総領事館への訪問やPMQ（かの「孫文」も通ったという「中央書院」の跡地が、その後警察官宿舎として使われ、今現在は情報発信スポットとして多くの人々の関心を集める）を視察しました。そして夕刻には現地でご活躍される香港広島県人会（会長：石原直氏）の皆様方と交流会を開催しました。今回の交流会は一昨年度に続いて2回目の開催となり、JETRO香港事務所長の小野村拓志氏、フレッド・カン法律事務所の武藤錬太郎氏にもご参加賜りまして、総勢15名にて現在の香港事情や現地駐在員としてのご経験、地元広島の話題などで、大変盛り上がりを見せた会となりました。今後も、協会会員の香港フォーラムへのより多くの参加を呼び掛けるとともに、香港広島県人会との交流を図っていきたいと考えております。

全国協会交流会にて

香港広島県人会との交流会にて

NIIGATA

新潟日本香港協会　事務局

2015年春節セミナー＆パーティーを開催

新潟日本香港協会では2月24日(火)に、今回で2回目となる「2015年春節セミナー＆パーティー」をホテルイタリア軒にて開催しました。

セミナーの第一部では香港貿易発展局大阪事務所所長の伊東正裕氏より、「日本食品輸出先としての香港の現状と展望」と題し、近年の食に対する健康・安全志向の高まりで日本食品への関心が高まっている香港の食品市場動向や輸出にあたってのポイント等をお話しいただきました。品目別でみる香港の食品輸入規制は大変分かりやすい説明で参加者からもとても参考になった等の声がありました。また、日本では市場に出回る事が少ない「小さすぎる紅芋」が香港ではスイーツの食材になったり、「大きすぎる梨」が大きいものはおめでたい（縁起が良い）とされる香港では春節用の贈答品になったりと日本では考えられないことでも香港ではビジネスに繋がるという新たな発見についてもご説明いただき、参加者の皆様の海外ビジネス拡大のヒントとなりました。

続いて、第二部では香港貿易発展局マーケティング・アシスタントの丸子将太氏より「マンガ・アニメが推し進める香港からの“地方創生”」と題しご講演いただきました。短い時間ながら、日本のコンテンツ産業の現状と今後の発展についてご説明いただき、また、今年の7月15～21日に香港コンベンション＆エキシビジョンセンターで開催される「第26回香港ブックフェア」の概要についてもご説明いただきました。当協会では、この香港ブックフェアへの会員限定視察ツアーを計画しています。詳細が決まり次第ご案内させていただきますので是非多くの会員の皆様にご参加いただければと思います。

セミナー終了後、会場を隣に移し春節パーティーを開催しました。パーティーにはセミナー登壇者をはじめ総勢40名の方が集まりました。

齋藤吉平理事による開会挨拶の後、中華人民共和国駐新潟総領事館総領事の何平（カ・ヘイ）氏、香港貿易経済代表部次席代表の徐逸（アルビス・ツイ）氏に来賓挨拶をいただきました。第一部のセミナー講師を務めた伊東正裕氏による乾杯のご発声により、盛大にスタートしました。パーティーには多数の異業種の方々が出席されており、参加者は名刺交換や香港に関する意見交換を行い、会員同士の良い交流の場となりました。

パーティー後半、今回初めてとなる「お楽しみ抽選会」では、会場となったホテルイタリア軒様よりレトルト食品の詰め合わせセット、新潟県内を中心に日本料理を11店舗展開している会員の株式会社よね蔵様より今年3月に香港の銅鑼湾にOPENした日本料理店「海老の髭」のお食事券、そして、キャセイパシフィック航空様より日本－香港ペア往復航空券をご提供いただきました。豪華景品のお陰で抽選会は大いに盛り上がり、景品を当てた参加者の顔からは笑みがこぼれていました。景品を提供してくださった協賛企業、会員の皆様にこの場を借りて感謝を申し上げます。最後は当協会の髙橋秀之理事による閉会の挨拶でパーティーを締めくくりました。

なお、ご多忙な中、ご参加いただいた皆様と有益な情報をご提供いただいた講師のお二人には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

次年度におきましても、香港貿易発展局や香港経済貿易代表部等の諸機関と連携しながら、会員の皆様により良い各種ビジネスサポートの提供に努めていきたいと思います。

春節セミナーの様子

春節パーティーでの記念撮影

COLLAGE

MODERN *fine* DINING

ダイナミックな景観と愉しむコンテンポラリーなお料理

選りすぐりの食材と洗練されたシェフ独自のプレゼンテーション
フレンチとヨーロピアンスタイルが見事に調和したダイニング
ミシュランで星を獲得しているシェフ・ド・キュイジーヌ前田慎也の
革新的なアプローチをご堪能ください

Contemporary cuisine with sweeping city views

Experience Michelin-starred Chef de Cuisine Shinya Maeda's innovative approach to dining with the very best of French and European culinary styles, ingredients and unique presentation.

CONRAD TOKYO

the luxury of being yourself

conradtokyo.co.jp/collage
tokyoinfo@conradhotels.com
ご予約 / Reservations: 03-6388-8745